

第16回 日能研

# 文学コンクール



## 奨励賞

【創作文】花になったクラリツサ

鷗友学園女子高等学校・二年

高城 郁花さん

### 作品に対する思い・感想

人は失ったものに目を向けがちですが、私はそこから生まれた何かに目を向けられる人でありたいです。結末にもこのような思いを込めました。そして、私自身が生み出せる人にもなれるよう、書き続けていきたいと思っています。

最後に、この度奨励賞という名誉な賞に選んでいただきまして、心より光栄に思います。ありがとうございました。

花になったクラリッサ

ある晩、町の外れに住む若い医師・アルバートの住む小屋の扉がノックされた。

「ごめんください」

扉の向こうからは控えめな女性の声が聞こえる。夜だろうと症状の重い患者がいたら呼ばれるのは医者宿命だ。アルバートは扉を開けた。

「誰か、急病人でも」

扉の横には、すぐ問診できるよう道具が入った鞆とジャケットが掛けられている。片手でそれらを取りながらアルバートが見た女性は、つやつやの長い黒髪で、二十歳くらいに見えた。綺麗な顔立ちをしていたが、悩んでいるような表情だった。無論、アルバートの家まで訪ねる者は誰か自分の身近な人の体調が優れないのであるから、良い顔をしている者はなかない。アルバートは大して気にとめなかった。

「私を匿ってほしいんです」

女性はアルバートにそう言った。

「匿……う？」

女性はその時初めてアルバートと目を合わせた。

「お願いします、きつと数日だけで済むので」

女性の必死な声を聞いて、お帰りくださいとはアルバートも言えなかった。

女性の名はクラリッサと言った。町から離れた村に住んでいて、予想通り二十歳だった。身にまとっている地味な茶色のワンピースの通り、あまり裕福とは言えそうになかった。アルバートが出したお茶を飲んでいる最中も、クラリッサは安心していきつけないようだった。

「それで、匿うとは、どうして？」

アルバートはクラリッサの向かいに座った。クラリッサは何も言わず袖をまくった。匿うのだからもう少しこちらにも配慮してほしいものだと、無愛想な目の前の女性にアルバートは思った。

しかし、アルバートのそんな考えはすぐに消えた。

クラリッサの腕には、一面に花が咲いていた。

アルバートは口が聞けなかった。当人のクラリッサはため息をつくばかりで、事情も説明してくれない。薄紅色の、雫型の五枚の花びらでなっている名も分からない小さなその

花は、可憐で美しいものであったが、人の腕を埋め尽くしていると不気味であった。アルバートはその腕に触れることもできず、ただ眺めていた。クラリッサは淡々と言った。「私の体が、どんどん花に埋め尽くされていくんです。染まるように、だんだん、咲いていくんです」

クラリッサはそこで袖を戻した。手の先は普通の人間のものであった。

「原因は分かっています。一週間前に食べた、同じ花に違いありません」

「花を食べた？」

アルバートは今、オウムでしかなかった。今まで色々な患者を見てきて、その中には肌がひどい状態のものもいたが、花が咲いているものは見たことがなかったのだから、無理もない。

「とっても綺麗で美味しそうだったんです。一輪だけ、周りの花とは違っていました。食べてみれば、甘酸っぱくて、どんな高級な果実にも劣らないと思いました！……でも、食べるべきじゃなかったんです」

クラリッサはまたため息をついた。絶望の淵に沈んだこの女性をどうするかが、アルバートの課題であった。しかし、アルバートにこれを治すことはできない。できることと言えば、クラリッサが望んでいる「匿う」こと。もともと人を助けたくて医師になったのだ。形は違えど、これも人助け。

「分かりました。どうぞ家へいて下さい」

クラリッサはその時、初めて笑った。

その美しい笑顔に、アルバートは心奪われた。

アルバートはクラリッサにベッドを譲った。色々と聞きたいことはあったが、クラリッサはだいぶ疲れている様子だった。また明日、とアルバートはランプの灯を消した。

翌日、アルバートは変な静けさを感じて目を覚ました。ベッドのあたりからやけに甘酸っぱい華やかな良い香りがする。寝ぼけた頭で何も考えず、アルバートは布団をめくった。

クラリッサのいるはずの場所に、薄紅色の花がああ形の形のままに盛られていた。

「まさか」

アルバートは呟いた。外へ出る。そこに求めている人の姿がないことも分かっていたが、探さずにはいられなかった。今度はアルバートが絶望の淵に立たされた。力なく小屋に戻ったアルバートは、触れることの叶わなかった女性の花の手を、優しく撫でた。

視界が霞んだ。

日が昇っていくのを感じた。一日は始まっている。アルバートはベッドを見つめながら、どうすればいいのかと途方に暮れていた。

ふと、クラリッサのワンピースのポケットに手紙が差し込んであるのを見つけた。アルバートはそれを開いた。クラリッサのものであるうこれまた綺麗な字で、こうしたためられていた。

『私が全て花になった暁には、私をどうか埋めて下さい。父は私をサーカスに売ろうとしています。逃げ出した私を助けたと分かったら、今度は貴方様が危険です。父は何をするか分かりません。見つからないように、どこか温かい土の中で、永遠に眠らせて下さい。』  
たったこれだけであった。家族すら頼れなかったのだ、自分の体が花に染まっていく不安の中で。どれだけ心細かったであろうか。アルバートは思いを馳せた。

庭に出て、アルバートはスコップを取った。一番陽の当たる場所に、大きな穴を掘った。そこにクラリッサを寝かせた。

土をかける前、アルバートはこの美しい女性がいなかったことになってしまいうのに寂しさを感じた。あつてはならないことだと思った。

悩んだ末、アルバートは一枚だけ花びらを取った。医学書によって押し花と化されたそれは、白い薄紙に包まれ、若い医師の胸ポケットから動くことはなかった。

これは十年前の話である。

今日、アルバートはクラリッサの眠る場所から若い芽が顔を出しているのを見た。

心なしか、二葉は薄紅色に見えた。